

# 占い・おみくじをめぐる学際的研究

松宮 朝・大野 出<sup>(1)(2)</sup>

## 1. 本稿の目的と概要

本稿は、2007年度愛知県立大学学長特別研究「[未来]をめぐる学際的研究」(研究代表者：福沢将樹)、および、2007～2010年度科学研究費基盤研究(C)「[霊籤、御籤、神籤]をめぐる思想的展開を中心とした学際的研究」(研究代表者：大野出)の研究成果の、現時点での中間報告である。

ここでの研究課題は2つある。

1つは、若者の「未来」観という社会意識を探ることである。「未来」への意識をそのままとらえることは困難であるが、本研究が「未来」をめぐる学際的研究として行われたことに関連して、社会保障における不安や、心理尺度を用いつつ、「未来」の意識をとらえることができるのではないかと考えた。この点については、福沢編著(2008)に概要がまとめられている。

そしてもう1つは、おみくじ・占いに関する社会意識の把握である。これも本研究が共同研究として実施されたことに関連するが、おみくじ・占いという関心の高いテーマをかがりにして、「未来」に対する意識構造の一端をとらえることを目的としていた。

まだまだ理論的検討が不十分な点も多いが、本稿では後者の研究課題に関して、今後の研究のための先行研究・分析枠組みの整理と、基本的データの分析を最優先に、中間報告として提示するものである。ここでは2つの調査研究を行っている。

第1に、占い・おみくじを受容する側の意識構造の分析である。学校調査と愛知県D市調査から、探索的な分析を試みている(2.)。

第2に、おみくじを提供する側の分析である。おみくじを提供する側は、おみくじに対してどのような意識・考えを持っているのかという点について、

2008年3～4月に実施した神社調査の結果の概要を示したい（3.）

最後に、本稿の分析に続く研究の課題を提示している（4.）。

## 2. 占いやおみくじに対する意識<sup>③</sup>

ここでは、占いやおみくじに対する意識という、受容する側の研究成果を整理しておきたい。

1973年より5年ごとに実施されているNHK放送文化研究所による調査には、「おみくじ・占い」に関する調査項目がある。「この一、二年のおみくじ・占いの経験」としては、1973年に19%で、1978年に23%となった後、2003年調査でも23%とほぼ変化がない<sup>④</sup>。

しかし、世代別に見ていくと、注目すべき傾向が見られる。2003年調査で60歳以上の高年層では11%であるのに対して、30～59歳の中年層では25%、16～29歳の若年層では44%と、若年層の「おみくじ・占い」経験が明らかになっている（NHK放送文化研究所編，2004：142-143）。

こうした点を、すでに見田は、1973年調査と1978年調査の分析においても指摘していた（見田，1984）。見田（2007：86）においても、2003年調査から「あの世、来世」、「奇跡」、「お守りやお札などの力」、「易や占い」などを信じる比率の増大が指摘されている。

さて、このような占いをめぐっては、露木まさひろ（1993）による「占い師」に迫った仕事が有名だが、近年も、鈴木淳史（2004）、板橋（2004）、鈴木正崇（2006）などの仕事が積み重ねられつつある<sup>⑤</sup>。その中でも占いに関する実証研究は、主に社会心理学の分野で行われてきたと考えていただろう。ここでは、大きく分けると2つのタイプの研究が存在している。

1つは、占いという非科学的な事象になぜ関心を持ち、信じるのかという視点による研究である。菊池・谷口・宮元編著（1995）、菊池・木下編著（1997）は、特に若者の占いに対する関心を、非科学的知識をなぜ信じるのかという視点から読み解くものである。また、占いのメカニズム、占いがなぜ信用されるのかという点についても多くの調査研究が積み重ねられてきている（松井，1997；村上，2005；福田，2007）。これらの研究では、占いの非科学的性格の

問題にこだわるのではなく、なぜ、占いが信用されるのか、その受容過程が丹念に分析されている。

次に、占い経験と「未来」観との関連に注目した先行研究として、鳥山（2002：59）では、大学生を対象とした調査を実施している。ここでは女性の方が男性よりも占いを信じる（女性の約2/3が信じるのに対して、男性では約2/3が信じない）という知見<sup>69</sup>とともに、人生観と占い受容には関連性がないことなどが明らかにされている。井上順孝（2003：36-39）も、大学生・短大生・専門学校生調査から、占いに関する経験についても、信頼についても、男性より女性の方が顕著に高いことを明らかにしている。

より詳細な分析としては鈴木一啓（2001）を挙げることができる。鈴木は、10代後半から20代前半の大学生を対象とした調査を実施している。ここでの知見を挙げておくと、将来の明暗と信用する占い数には関係がないこと、占いを信用する場合・条件としては、圧倒的多数が良い推断の場合のみであることといった点が明らかにされている。

ここでは、2007年に実施した、愛知県内の大学・高校・中学調査から見ていきたい。大学生調査は、愛知県の郡部に位置するC大学にて、2007年12月の授業時に実施している。中学生・高校生については、いずれも愛知県の郡部に位置するA中学校、B高校にて、2007年9月の授業時に実施している<sup>70</sup>。

このように厳密なサンプリングに基づく調査ではないという限界はあるが、まずはその概要から見ていこう。表1は対象者の属性である。

表1：調査対象者の属性（年齢）

A中学校			B高校			C大学		
	度数	%		度数	%		度数	%
12歳	44	18.1	16歳	23	8.0	10代	73	34.3
13歳	68	28.0	17歳	141	49.1	20代	135	63.9
14歳	91	37.5	18歳	118	41.0	30代	1	0.5
15歳	39	16.1				40代	0	0.0
						50代	1	0.5
DK.NA.	1	0.4	DK.NA.	6	2.1	DK.NA.	3	1.4
計	243	100.0	計	288	100.0	計	213	100.0

特定の学年に偏らないようにと配慮したが、B高校では、1年生から回答を得ることができていない。また、C大学生の30代、50代の回答者は社会人学生である。

表2：調査対象者の属性（性別）

	A中学校		B高校		C大学	
	度数	%	度数	%	度数	%
男性	124	51.0	160	55.6	49	23.0
女性	119	49.0	126	43.6	162	76.1
DKNA	0	0.0	2	0.7	2	0.9
計	243	100.0	288	100.0	213	100.0

中学生、高校生とも男女比に大きな偏りはないが、大学生のみ女性が約3/4となっている。これはC大学の学生構成によるものである。

このように、10代、20代の「若者」を母集団としたサンプルではないという限界があり、サンプル的な偏りが多い。その意味では厳密な分析に耐えることのできるデータとは言えないかもしれないが、厳密性には目をつぶることにして、探索的な仮説構築につなげることを目的に、以下では中学生・高校生・大学生の比較から見ていこう。

まずは占いに関する興味である。

表3：占いに関する興味

	A中学校		B高校		C大学	
	度数	%	度数	%	度数	%
興味あり	127	51.0	179	62.2	167	78.4
興味なし	114	49.0	108	37.5	45	21.1
DKNA	2	0.0	1	0.3	1	0.5
計	243	100.0	288	100.0	213	100.0

占いに関する興味としては、「興味あり」という回答が中学生で52.3%、高校生で62.2%、そして大学生では78.4%となっている。この結果を単純に比較してみると、世代が上がるにつれて占いへの興味が高くなるようにも思われる。もっとも、この知見は中学生と高校生ではあてはまるかもしれないが、大学生

は女性の多さという属性の偏りを考慮する必要があると思われる<sup>69)</sup>。

この点について、男性と女性による占いに関する興味の違いを示したのが表4である。

表4：占いに関する興味×性別

	A中学校 度数		B高校 度数		C大学 度数	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし
男性	55	68	78	82	30	19
女性	68	61	101	25	137	24
計	113	129	179	107	179	24
検定	n.s		p < 0.01		p < 0.01	

中学生調査では、性別における占いに関する興味の違いはない。それに対し、高校生、大学生では、どちらも、女性の方が有意に占いに関する興味への関心が高くなっている。これは鳥山(2001)などの結果を支持するものである。

表5：占いの経験(複数回答)

	A中学校 度数 %		B高校 度数 %		C大学 度数 %	
	血液型に関する占い	162	66.7	197	68.4	178
生年月日に	165	67.9	211	73.3	189	88.7
姓名判断に	69	28.4	94	32.6	91	42.7
手相に	49	20.2	57	19.8	67	31.5
タロット占い	54	22.2	38	13.2	49	23.0
おみくじ	167	68.7	161	62.8	177	83.1
その他	14	5.8	3	1.0	7	3.3

次に、占いの経験である。「血液型に関する占い」、「生年月日に関する占い」、「おみくじ」がいずれも高い比率であり、特に大学生ではそれぞれ83.6%、88.7%、83.1%である。

表6：今までに大事なことを占いで決めたことがあるか？

	A中学校		B高校		C大学	
	度数	%	度数	%	度数	%
ある	28	11.5	28	11.5	28	11.5
ない	215	88.5	215	88.5	215	88.5
DKNA	0	0.0	0	0.0	0	0.0
計	243	100.8	243	100.8	243	100.8

ただし、占いの経験の多さにもかかわらず、占いによって大事なことを決定したということは少ない点にも注意する必要がある（表6）。この点は、若者の占いへのかかわり方を示唆するものである。

さて、以上のデータは、大学生・高校生・中学生を対象としたものであり、また、サンプルも偏りがある。

ここでは、より一般的な占いに関する意識構造を探るために、愛知県D市の住民意識調査から見ておきたい（表7）。

D市調査は、2005年1月から2月にかけて実施した市民意識調査で、選挙人名簿から単純等間隔系統抽出で20～80歳までの有権者800名を対象に実施したものである。有効回収率は44.8%であった。

表7：D市調査の概要

調査地	調査期間	有効回収数（有効回収率）
愛知県D市	2005年1～2月	358（44.8）

郵送調査、選挙人名簿より単純等間隔系統抽出、20～80歳

そもそも、この調査は占い・おみくじに関する意識を研究の中心に据えた調査ではないが、本稿の問題関心から関連する内容について、分析を行っていきたい。

表8：手相や占いに関する意識

どんなに科学が進歩しても、手相や占いも馬鹿にはできない	%
そう思う	19.3
どちらかと言えばそう思う	38.3
どちらかと言えばそう思わない	17.6
そう思わない	21.0
無回答	3.9

表8は、手相や占いに関する意識である。

「どんなに科学が進歩しても、手相や占いも馬鹿にはできない」という質問に対して、「そう思う」が19.3%、「どちらかと言えばそう思う」が38.3%であり、両者を合計すると57.6%と半数を超えている。

さて、このような占いなどに対する属性や意識とどのような関係があるのだろうか。

ここでは、「どんなに科学が進歩しても、手相や占いも馬鹿にはできない」に関する項目を従属変数とした重回帰分析を行った。

この手相・占いに関する意識を規定する要因としては、上述した先行研究では、性別、年齢の効果が考えられていたが、今回の分析では、性別、年齢の2つの変数に加え、学歴の効果、世帯年収という階層の効果、「新聞を読む時間」という3つの変数を独立変数とした重回帰分析を行っている。

表9：変数説明

変数	変数の規定
占いに関する意識	「そう思う」3～「そう思わない」0
性別（女性）	「男性」0、「女性」1
年齢	20～80歳
学歴	「高等教育」3、「高卒」2、「中卒以下」1
世帯年収	「300万円以下」1、「300～600万円」2、「600～900万円」3、「900～1200万円」4、「1200万円以上」5
新聞を読む	「新聞をどの程度読んでいますか」ほぼ毎日じっくり読む5～ほとんど読まない1

表10：重回帰分析の結果

独立変数	$\beta$
性別（女性）	.139*
年齢	-.167*
学歴	.025
世帯年収	.011
新聞を読む	-.046
F 値	4.707
調整済み決定係数	.056

\* $p < .05$ 

表10は重回帰分析の結果である。

あくまでも探索的な分析ではあるが、標準化偏回帰係数の値を見ていくと、女性であるほど（ $\beta$ ：.139）、年齢が低いほど（ $\beta$ ：-.167）、手相や占いに對する肯定的な結果となっている。

その一方で、学歴、世帯年収、「新聞を読む時間」のような、知的柔軟性、階層、情報接触度については効果が見られない<sup>10</sup>。ここから見てくるのは、性別という年齢という基本的な属性の効果の強さである。

もっとも、これらの点に関する解釈を行う理論的説明の準備はまだ十分ではないため、ここでは分析結果の提示にとどめたい。さらなる分析は今後の課題としたい。

### 3. おみくじに対する神社調査から

前節では、占いなどに対する受容する側からの研究であったのに対して、本節では提供する側の意識から考えてみたい。

ここで事例としているのはおみくじである。

神社本庁教学研究部監修（2004）では、神社本庁の公式見解として、①おみくじを単に吉兆判断の材料とするのではなく、今後の生活指針としていくこと、②射幸心を煽らないという戒めなどが書かれている。前者はおみくじを受容する側に対するものであるが、後者については、江戸時代の事例に対するものとはいえ、おみくじを提供する神社側への言及がなされたものと見ることができる。



おみくじに関する研究としては、島（1995、1999）では、実際のおみくじの吉と凶の比率などが丹念に調べられている。中村（1999）は、おみくじのフォークロア、歴史的分析を行っている。また、近年では金子（2008）のように、おみくじというビジネスに対する注目も見られるようになった。

しかし、実際にどのような考えや意識のもとでおみくじが提供されているのかという点については、これまであまり研究の蓄積がない。そこで、おみくじを提供している神社を対象に、おみくじに関する実態、およびおみくじに対する意識に関する調査を実施した<sup>99</sup>。

ここで対象としたのは、「全国著名神社名鑑」、「神社名鑑」から抽出した2217の神社である。日本にあるすべての神社を網羅したわけではないが、神社に関するほぼ偏りのないサンプルであると考えられる。

調査は郵送法で、2008年3～4月に実施した。このうち宛先不明で返送されたものが8通で、913の神社から回答をいただいた。有効回収率は、41.3%であった。

まずは、おみくじの有無について見ていこう。

表11：おみくじの有無

	度数	%
おみくじがある	808	88.5%
おみくじがあるがない	93	10.2%
無回答	12	1.3%
計	913	100.0%

そもそもおみくじがある神社が回答していただいた可能性が高いわけだが、808の神社（88.5%）がおみくじを提供していた（表11）。

表12：おみくじを採用した時代

	度数	%
江戸時代以前	18	2.2%
明治期	46	5.7%
大正期	24	3.0%
昭和初期	164	20.3%
昭和中期以降	517	64.0%
無回答	39	4.8%
計	808	100.0%

表12はおみくじを開始した時期である。昭和初期が20.3%で、昭和中期以降が64.0%と大半を占めている。

次に、おみくじ提供する神社の意識・考えについて見ていきたい。

この点については、「貴社のおみくじに関する神社としてのお考え等がございましたらお書き下さい。」という形でお尋ねし、自由記述とした。調査では調査への疑問や要望を含め、397の自由回答を得ている。

この自由回答については、代表的なものを中心に分類した上で、その概要を紹介したい。

#### ①神社にとっておみくじはどのような意味を持っているのか？

まずは、神社にとってのおみくじの意味に関する回答である。以下の回答に見られるように、神道強化や、広報的な機能、そして、数としては少ないが、収入という現実的な回答もあった。

「神道強化や人生の指針に役立つ。神社の収入にもつながる。」

「広報の一手法としておみくじによって、「神社が身近な存在であること」を一般社会に示して行きたいと願っております。」

こうした中で、特に参拝者と神社、氏子と神社をつなぐものとして重要な機能を果たすとする見解が多く見られた。以下に代表的な意見を挙げておこう。

「最も手軽な神と人をつなぐツール」

「神社と参拝者をつなぐ大切なものです。」

「おみくじは神社参拝の要因だと思います。」

「古いブームの中100円で楽しめるなら深刻さもなく神社を身近に感じてくれるのでよいと思う。」

「庶民との心のつながりの一端を負ふ物だと思います。参拝者は殆どおみくじを受けます。」

「おみくじを通じた参拝の方とコミュニケーションを取ることが多々あります。若い方や外国の方などは、おみくじの古い言いまわしがよく分からないとおっしゃいます。対面しておみくじをよみながら意味等を説明しておりますとコミュニケーションがはかれます。」

「氏子の皆様から極めて重要なものとして位置づけられております。神社としては欠くことの出来ないものです。」

「神社と氏子崇敬者とのつながりを保つ上でも大切な手段だと思う。」

さらに、積極的に参拝者のニーズにこたえるおみくじを用意するという意見も多く見られた。

「参拝者が多く求めているので、神社におみくじは必要不可欠なのではないか。」

「おみくじをきっかけに神社に足を運んでいただけたら幸い、と考え参拝者のニーズに合うよう、お守り付きのおみくじも出しております。神様のお言葉（おみくじ）と共にお守りをお持ちいただき、より一層お力をいただくよう、教化しております。」

「若者から年輩の方まで選んで頂けるよう5種類のおみくじを用意しています。2～3年ごとにニーズに合うおみくじを交換しています。」

「最近では若い女性が多くおみくじを引きます。若い人達用におみくじを用意してあります。」

「他神社にはあまり置かれていない珍しいおみくじを置くようにしている。」

逆に、おみくじに対する見解としては、次のような慎重なニュアンスのものも見られた。

「今日、おみくじの本来の意味が失われており、又おみくじを当神社で用意する人的な問題（知識、管理）、経費の問題等考えればおみくじを行うことは無理と考えている。」

「迷信により人を惑わせてはならない。またはそれによって収入を削ってはならない。」

「みくじはともすれば、人々に大変な影響を与えるものと思います。ただ単に興味本意であれば問題はないと思うが、崇敬する神社等におみくじの文言を参考に考えている人には特に慎重にしなければならないと思います。」

## ②おみくじの効果について

では、おみくじの効果についてはどのようにとらえられているのだろうか。

最も多かったのが、おみくじが神から与えられた生活指針としてとらえるべきとする、本質的なとらえ方である。

「おみくじは吉凶を占うものではなく、神のご啓示に類するものととらえております。神の教えから自分を見つめ直し、正しい道を歩む。それが、おみくじのもたらすご神徳だと考えています。」

「おみくじは神社の御奉納の御神徳の宣揚に結びつくものであり、おみくじの内容によって参拝者が左右されるものでもなく、引いて、参拝者が内容を理解し、日常、その時その時の一助となり、一つの指針となるものであれば幸いである。」

「吉凶を見るだけではなく、背かれてあること全てを理解し、教訓として日々を過ごしていただきたい。」

「おみくじは個人の運勢や吉凶を占うために用います。物事の始めあたり、先ず御神意を仰ぎ、これに基づき、懸命に事を遂行する信仰の表れです。おみくじは単に吉凶を判断するだけのものではなく、おみくじに書かれている内容を今後の生活指針としていくことが大切です。」

「おみくじは神様のお導きであり、直接神社へ参拝された折にのみ、参拝者に許されるものであると考えます。決してインターネットなどにのせるものではないと思います。」

ただし、このような本質的なおみくじに対する位置づけというよりも、楽しみとして消費するようなおみくじ受容する気持ちに対しても肯定的にとらえる見解も見られた。

「くじである以上当たりも当たらぬものもあり、他愛ないといえれば他愛もないものといえる。しかしこれによって勇気付けられたり、いさめられたりしていく規模は生活のめりはりとなり庶民にとってはこのようなものがあって然るべきだと思う。」

「昨今の人達は「おみくじ」を「星占い」と同程度のものとして受け止めているようであり、神社としても替わりのように、託宣的なものとしては見ておらずその内容・結果について深刻なものとしては考えていない。今の人は只の興味本位で求めているようで、行動の指針としてははしておらぬようですが、それはそれで良いと思っています。」

「悩みを持つ人の多少なりの癒やし、又、一枚のみくじを見せ合う事で笑いや会話をする事で、輪や和みが出来ものだと思っております。」

「正月の初詣に参拝し、過去の良い事、悪かった事両面について反省を込めて新しい年のスタートに際し決意があると考えます。参拝後の「おみくじ」をなさる方の気持ちはさして深刻な気持でやられているのではなく、余興的な要素のもので面白く楽しい行事の一つと考えている。」

「おみくじは、一種の託宣と考えている。ひいたおみくじによって、その人の人生が左右されてはならないと思うが、神から頂いた、ひとつの言葉として、参考になる程度におみくじの内容を思っ頂ければ良いのではないか。」

「大吉、吉などで一喜一憂するもよし、内容を自分の戒めとするもよし。」

### ③おみくじは占いか？

おみくじは占いとしてとらえられているのだろうか。

「おみくじは占いの一種」という考えがある一方で、占いであることを否定する見解も見られた。

「おみくじはあくまで占の類と位置付けている。吉、凶、又その内容については各々の解釈でいいのではないかと、そして、今後の個人の指針とすれば良い。」

「占術は大きく『命』『相』『卜』の3つに分けられるが、『籤』はこのうち『卜』に当たり、目前の問題を占うものと説明しています。」

「吉凶に囚われず、内容をよく読み、反省すべき点は反省し、神様からの励ましの言葉と受け止め、日々努力を怠らないことが大切だと思う。おみくじは占いではない。」

ここで注目されるのは、次のような見解である。

「小さなおみくじにその引く方の今の気持ちや進み方が詰まっていると思っております。偶然に手にするものではなく、本人の選択と天のガイドがその質を引き上げることになるのでしょうか。」

「良くも悪くも、うける人の心がけを神が示している。悪ければ、自己への反省と慎みを思い起こし、良ければ、さらに人生を積極的に生きる指針となす。」

「自分の考えは、8～9割決まっています。残りの1～2割が少し不安なのです。おみくじを引いて、その人の背中を押す。励ましてやれるおみくじでありたいと思います。」

ここでは、単に受動的におみくじの内容をとらえるのではなく、おみくじを引く人の側の主体的な働きかけが要請されている。おみくじを提供する側の論理を考える上で、興味深い見解である。

また、次のようなおみくじの的中率に対する言及も見られた。

「おみくじの吉凶はかなりの的中率を持っていると云われています。なぜなら、世の中には偶然と云う事はあり得ず、神の導きにより、必然的に起こる事であるからで、無作為で出てくるおみくじは必然的な御神意を引き出す確率が高いと云えましょう。おみくじに示された神の言葉は十分に注意して理解したほうがよいと云えます。」

### ④「凶」・「大凶」をめぐる

そもそも吉凶判断については、それほど重視されているわけではないと思わ

れる。これは以下の自由回答に代表される。

「信仰の心がある人にとっては神の啓示を受け取ってくれる方がいますが、ほとんどの方は大吉や凶に感わされるだけである。」

「吉でよろこび、凶を引けば嘆くし、その時の運・不運と考えればよい。この不運を吉に考えようと思う心が大切であり、そこで実践力を養うべきである。その年の運は、その時々運はやはり、おみくじ一つひとつのよりどころではなからうか。おみくじがよいか悪いかはその人の心の持ち方であり、何も気にする事はないと思う。」

「吉凶を占うより、書いてある和歌を詠み解いてほしい。同じおみくじをひいても、そのときの心の状態により意味が違う場合が分かる。」

次に、おみくじにはつきものの吉凶判断であるが、特に「凶」、「大凶」については、かなり否定的な見解が見られた<sup>00</sup>。

「和歌や神の教には個人が求める心の浄化、きっかけになれば良いと常に考えております。故に凶（みくじ）は入っておりません。」

「おみくじを受ける人は、ほとんど子供から若い方が多くみられる。特に女性が多いように思えますので、それに対応するようなものを出しています。とは言っても業社任せですが、凶は入れないようにしています。」

「病院に近い関係上、患者さんやその家族の方がよく見える。「病い」の項目で、消極的な記載があると困る。患者さんが前向きで元気づける記述が精神面でも安心させてあげられる。先代の宮司のときに、おみくじを引いた老婆が2回続けて凶をひき、嘆いているのを見てから、凶の入っていないおみくじにしたと聞いております。恐らく暗い気持ちにならないようにとの配慮によるものと思います。」

「いわゆる「うらない師」のように、その人に対して不安をあおるような重みがおみくじにはない。悪いことが書いてあれば注意をして過ごそうと皆が思えば、良いものだと考える。従って、「大凶・凶」などは不要。」

「あくまでもはげましになる様凶等のおみくじは入れないことにしている。」

「参拝者の方々が「凶がはいってますか」とよく聞かれます。折角参拝にこられて、凶をひかれて帰られても、気になると思いますので、「凶みくじ」は入れないようにしています。」  
「大凶とか人の精神に希望を失う如きは排すべきかと存じます。今日ぐらいでも努力すればと希望のもてるような文言がよい。」

#### 4. まとめにかえて

以上、本稿は調査研究の中間報告の域を出ていないが、データの公表を最優先課題として、調査データの概要と基本的な分析に基づく知見をまとめたものである。今後の課題としては、さらなる詳細な分析が必要だが、次の点を挙げ

ておきたい。

うらないを受容する側の分析としては、調査データ自体のサンプリングの限界がつかまとう。しかし、調査データの分析においては単純集計が中心であるが、同一の調査項目による中学生・高校生・大学生を対象とした意識調査はあまり存在せず、探索的なデータ分析としては意味があったのではないかと考えている。今後は、D市調査の知見も踏まえつつ、理論的な分析が課題である。

次に、神社調査については、自由回答の分類のレベルにとどまっている。このような先行調査がないことから、まずは、調査データの分類を中心にしたが、今後は回答いただいた自由記述の分析を中心に、数量的な分析と、内容に関する質的分析を進めていくことにしたい。

## 注

- (1) 愛知県立大学文学部国文学科准教授。
  - (2) 本稿は、松宮が草稿を作成し、大野が加筆修正した上で、両者で調整を行ったものである。
  - (3) 本節は、松宮(2008)と一部重複している。
  - (4) ただし、「経験」ではなく、「信じているか」という質問では、比率が10ポイントほど低くなっている(NHK放送文化研究所編, 2004)。
  - (5) 「占い」とは明示されていない場合も多いが、「血液型」に関する研究は非常に多く蓄積されている。本研究においても検討すべき点も多いが、今後の課題としたい。
  - (6) この点は、すでに見田(1984)で指摘されている。
  - (7) いずれの調査も回答はプライバシーに配慮し無記名で行っている。なお、調査結果の詳細については、福沢編著(2008)を参照されたい。
  - (8) 大学生のデータについては、調査を実施したのが、占いに関する講義内容を含んだ松宮担当の授業時であったことも影響しているかもしれない。ただし、調査実施時においては占いに関する授業は実施していなかった。
  - (9) なお、手相・占いに関する意識との単相関(ピアソンの相関係数)は、次の通りである。性別(女性)(.187  $p<.01$ )、年齢(-.208  $p<.01$ )、学歴(.119  $p<.05$ )、世帯年収(.036 n.s.)、「新聞を読む時間」(-.154  $p<.01$ )。
  - (10) 調査票作成、およびリスト作成においては、細谷広大氏の協力を得ている。なお、調査票の内容は以下の通りである。
1. 貴社におかれましては、おみくじがありますでしょうか?
    - ①ある →2. へ
    - ②ない →5. へ
  2. それはいつ頃のものでしょうか?
    - ①江戸時代以前からのもの
    - ②明治期

- ③大正期
- ④昭和初期
- ⑤昭和中期以降

3. 貴社のおみくじには和歌、または和歌に類するものが記されていますでしょうか？

- ①記されている
- ②記されていない

4. 貴社のおみくじには漢詩、または漢詩に類するものが記されていますでしょうか？

- ①記されている
- ②記されていない

5. 貴社、あるいは貴社の周辺神社域に「天道宮」、「天道社」というような呼称のものがあ  
りますでしょうか？

- ①ある →6. へ
- ②かつてあったが今はない →6. へ
- ③かつてあったが今は名称が変わった →6. へ
- ④ない →7. へ

6. それはどのような名称でしょうか？

7. 他の神社で古いおみくじを用いている、あるいは所蔵しているという情報をご存じでし  
たらお教えいただけませんか。

8. 貴社のおみくじに関する神社としてのお考え等がございましたらお書き下さい。

00 逆に、「近いうちに凶を含んだ物に変えたい。凶も必要だと思う。」とする自由回答も1つ  
存在したことも付記しておきたい。

## 文献

板橋作美, 2004, 「占いの謎」文芸春秋社。

井上順孝, 2003, 「現代学生が示す宗教への意識と態度」『國學院大學日本文化研究所紀要』  
92:15-52.

NHK放送文化研究所編, 2003, 「NHK中学生・高校生の生活と意識調査」日本放送出版協会。

NHK放送文化研究所編, 2004, 「現代日本人の意識構造 [第六版]」日本放送出版協会。

金子哲雄, 2008, 「おみくじの原価は1円！」宝島社。

菊池聡・谷口高士・宮元博章編著, 1995, 「不思議現象 なぜ信じるのか」北大路書房。

菊池聡・木下幸司編著, 1997, 「不思議現象 子どもの心と教育」北大路書房。

佐々木宏幹・藤井正雄・山折哲雄・頼富本宏監修, 2006, 「日本占法大全書」四季社。

島武史, 1995, 「日本おみくじ紀行」日本経済新聞社。

島武史, 1999, 「かながわおもしろおみくじ散歩」神奈川新聞社。

神社本庁学術研究所監修, 2004, 「神道いろは」神社新報社。

鈴木淳史, 2004, 「占いの力」洋泉社。

鈴木一馨, 2001, 「占いに求める未来」『国立歴史民俗博物館研究報告』91:553-565。

鈴木正崇, 2006, 「占いの世相史」, 新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学 3 都市  
の生活リズム』吉川弘文館。

露木まさひろ, 1993, 「占い師！」社会思想社。



- 鳥山平三, 2002, 「大学生のライフ・スタイルと価値志向」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』1:53-67.
- 中村公一, 1999, 「一番大吉」大修館書店.
- 福沢将樹編著, 2008, 「「未来」をめぐる学際的研究」平成19年度愛知県立大学学長特別研究費報告書.
- 福田茉莉, 2007, 「古い情報の受容と信用度の関連」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』23:1-15.
- 松井豊, 1997, 「高校生が不思議現象を信じる理由」, 菊池聡・木下幸司編著所収.
- 松宮朝, 2008, 「「未来」をめぐる若者の社会意識調査中間報告」, 福沢将樹編著所収.
- 見田宗介, 2007, 「近代の矛盾の「解凍」」『思想』1002:76-90.
- 村上幸史, 2005, 「占いの予言が「的中する」とき」『社会心理学研究』21(2):133-146.

## 謝辞

本調査にご回答いただいた神社のみなさま、ならびに細谷広大氏はじめ調査にご協力いただきましたみなさまに深く感謝申し上げます。